船橋キャンパス新サークル棟の完成に寄せて

120のセルが生み出す学生のためのアジール

山中新太郎

グラウンド側から見た建物外観

計画の背景

平成 22 年 6 月 15 日，船橋キャンパスに新しいサークル棟が完成した。この施設は日大習志野高校の移転工事に伴い，キャンパスの南寄りにあったプレファブの部室棟が取り壊されることに合わせて，船橋キャンパスの約 50 の学部認定サークルを一堂に集める目的で計画された。設計は平成 21 年 1 月から始まり同年 7 月には実施設計を完成させるという厳しいスケジュールが課せられた。また施工も，計画地に建っていた既存の部室棟の解体・整地を含めて約 8 ヵ月という短工期が必要条件であった。学生のサークル活動の場である以上，当然ローコストでなければならない。こうした条件に応えるために，現場工程を簡略化した鉄骨造平屋建ての施設を設計することになった。設計にあたっては山中研究室を中心に基本設計のスタディを行い，グラフィックデザイナーの岡本健さんと共同で学生自らがサイン計画と施工を行う機会をもつことができた。

交流を促す仕掛け

サークル活動は授業や研究活動とともに大学生活における重要な活動である。この建物では大学の新しい魅力づくりの一環として，明るく，学生たちが相互に交流できるような施設が求められた。

設計にあたって，まず既存のサークルの実態調査を行った。各サークルが一堂に集まるといっても，それぞれの部室に求められる機能はまったく別々であり，サークル自体も入れ替わりがある。そのため，この施設には現時点での各室の自律性と多様性を受け止めながら，将来の変化にも対応できるようなシステムが必要であった。また，同じ趣味や活動で集まった集団はどうしても内向きになりがちである。新しい施設では学生たちの間で自然に交流が生まれるような仕掛けも必要であった。

グリッドを縫うように領域を作る

建物は建築可能な最大の大きさで外形を定めた。そして，3.8m × 3.2m のスパンで均等に柱を立て，柱に囲まれた空間を部室で使う 1 つの空間単位（セル）とした。出来上がった 120 のセルのうち 60 を部室などの個室に，残りの 60 を外部扱いの共用廊下に割り振り，それらをモザイク状に配置していった。中央付近には学生たちが集まりやすいミーティングルームや廊下の溜まりを配置し，多様な経路が生まれるように個室群を形成させる。こうして出来上がった平面形態に対して，それぞれの属性や隣接関係を考えながら各サークルを配置した。

座標と形式

この建物ではどこまで設計し，どこから使用者に委ねるのかという問題を考えさせられた。使用者である学生たちの自由をできるだけ発揮できるようにする一方で，無秩序や混乱を助長させるようなことは避けなければいけない。私は，この建物の設計を通じて彼らの活動のための座標を描き，機能ではなく形式を与えた。座標と形式があることによって，彼らは自分たちの居場所や他のサークルとの関係を相対化し，自分たちに与えられた自由の射程を意識できるようになる。

この建物を使い始めて 2 ヵ月ほどがたった。彼らはたくましく自分たちのアジールを築き始めている。上手に部屋の空間を使うサークルもあれば，ひたすらマニアックなもので埋め尽くしている部屋もある。やはり 1 つとして同じ使い方をしている部屋はないのだ。多様性は次第に部屋の閾を越えて，廊下やミーティングルームにもにじみ出してきている。この建物に移ってから他のサークルの活動が気になるようになってきたと，彼らは言う。サークル同士の交流も生まれつつあるようだ。これからもこの建築の座標と形式の上にさまざまな色が塗り重ねられていくことを見守っていきたいと思う。

（やまなかしんたろう・助教）

建築データ

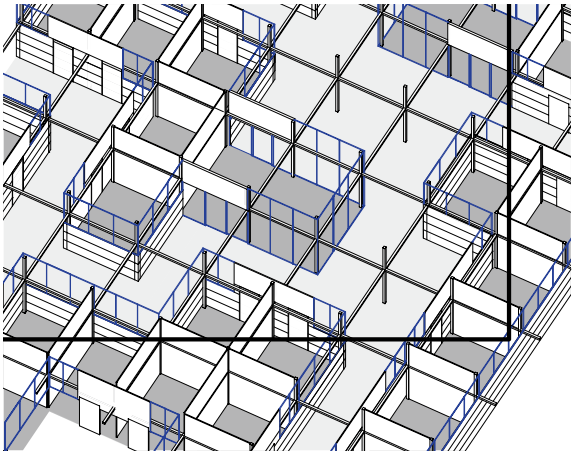
設計	建築	今村雅樹＋山中新太郎　日本大学理工学部 WG ＋協立建築設計事務所		
	構造	多田脩二構造設計事務所		
	サイン計画	岡本健＋日本大学山中研究室		
施工	熊谷組首都圏支店			
敷地面積	375,591.95m^2		建築面積	1,478.79m^2
延床面積	1,384.24m^2		階数	地上 1 階
構造	鉄骨造		工期	H21 年 10 月～ H22 年 6 月

中央付近のミーティングルーム

路地状の廊下部分

サイクリング同好会の室内

建物俯瞰



アクソメ図

平面図